

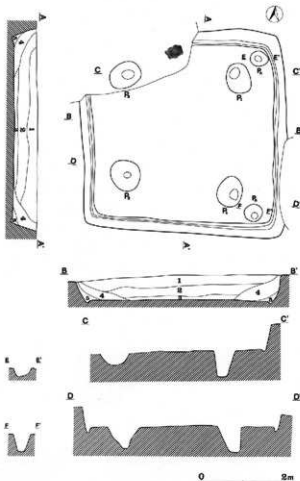
(5) H 5 号住居址

古墳時代

H 5 号住居址の検出位置は、第Ⅱ区Bけ・こ6・7グリッドである。北西隅とカマドはH 4 号住居址によって、東壁南半上部はH 6 号住居址によって破壊されていた。また、西壁の一部が耕作溝で破壊されている。

平面形態は隅丸方形を呈し、残存部では南北4.9m、東西5.0mを測る。壁は100度程の急傾斜で立ち上がる。確認面からの壁高は50~60cm程である。周溝は壁直下を全周したものと考えられ、幅7~15cm、深さ2~14cmを測り、断面はU字状をなす。

主柱穴は、H 4 号住居址床面下から検出されたP 2を含めるとP 1~P 4の4個からなり、壁際による規則的な配置で捉えられる。掘り方は大形で、P 1は75×56cm、深さ65cm、P 2は61×78cm、深さ29cm、P 3は75×72cm、深さ50cm、P 4は75×60cm、深さ63cmの規模を有する。また、北東隅に36×45cm、深さ20cmのP 5、南東隅に42×45cm、深さ44cmのP 6が確認された。なお、カマドは破壊されていたが、H 4 号住居址床面下から焼土が確認され、北壁中央に構築されていたものと考えられる。



第27図 H 5 号住居址実測図 (1 : 80)



写真28 H 5 号住居址

住居覆土は、1～3層が住居中央を埋める覆土で、1層が黒褐色土、2層が暗褐色土、3層が暗褐色土である。4・5層は壁際に流れ込んだ土層で、4層がバミス、ローム粒子を多く含む褐色土、5層が黒色土である。

遺物

本址から出土した主要遺物は少なく、土器で環・鉢・甕が検出された。

1は、体部が丸底を呈する底部との境に緩い傾をもつて外反し、ヘラミガキが施され、内面黒色処理された土器器杯である。住居中央部の床面に破片が分布していたものである。

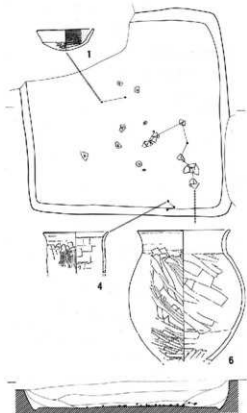
2は、内面黒色処理された土器器杯の体部破片で、Ⅱ区3層から出土している。

3は、口縁部が短く外反し、平底を呈する鉢である。西壁際の周溝上5層で検出されている。

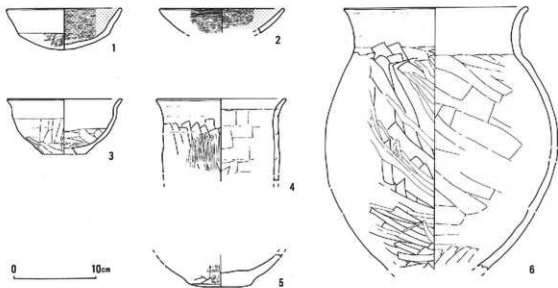
4は、口縁部が緩く外反し、ヘラケズリの後にヘラミガキがなされた小形の土器器長胴甕で、Ⅱ区南壁際の床面と5層に破片が分布していた。

5は、ヘラミガキが施された球胴形を呈する土器器甕の底部破片と思われる。Ⅱ区3層から出土したものである。

6は、頸部が直立し口縁部が短く外反し、胴中



第28図 H5号住居址遺物分布図



第29図 H5号住居址出土土器(1:4)

尖に最大径を有する土師器球胴甕である。ヘラケズリ後にヘラミガキが施されている。Ⅱ区床面から4層に破片が散在していた。

なお、住居中央床面に安山岩の角礫の散漫な分

布がみられた。

以上の土師器杯・土師器長胴甕・土師器球胴甕の特徴と組成から、Ⅱ5号住居址の土器群は、古墳時代後期の土器様相として理解されよう。

表8 Ⅱ5号住居址出土土器観察表

検出番号	種類	器形	口径	高さ	残存	状況	調査	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	14.0 — 5.1	口縁3/4 底部完形	赤ロタロ	内面：口縁ヨコナゲ・ふこみ部ナゲ→ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁ヨコナゲ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面：10YR6/1 断面：10YR6/2	Ⅱ区床面		
2	土師器	杯	(15.2) — (3.5)	口縁1/4	赤ロタロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：ヨコナゲ→ヘラミガキ	外面：5YR5/4 断面：10YR6/3	Ⅱ区3層		
3	土師器	鉢	(14.8) (5.5) 8.7	口縁1/8 底部1/8	赤ロタロ	内面：胴部→底部ナゲ→口縁ヨコナゲ 外面：胴部・底部ナゲ→口縁ヨコナゲ	内面：5YR5/3 外面：5YR5/3 断面：5YR5/3	Ⅱ区5層		
4	土師器	甕	15.8 — (10.0)	口縁7/8	赤ロタロ	内面：口縁ヨコナゲ→胴部ヘラナゲ 外面：口縁ヨコナゲ→胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：5YR5/1 外面：5YR6/4 断面：5YR5/1	Ⅱ区床面 Ⅱ区5層		
5	土師器	甕	— 7.6 (4.5)	底部完形	赤ロタロ	内面：ナゲ 外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：5YR6/4 外面：5YR5/1 断面：5YR7/4	Ⅱ区3層		
6	土師器	甕	22.2 — (32.2)	口縁完形	赤ロタロ	内面：口縁ヨコナゲ→胴部ヘラナゲ 外面：口縁ヨコナゲ→胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR7/6 断面：7.5YR6/3	Ⅱ区床面 Ⅱ区4層		

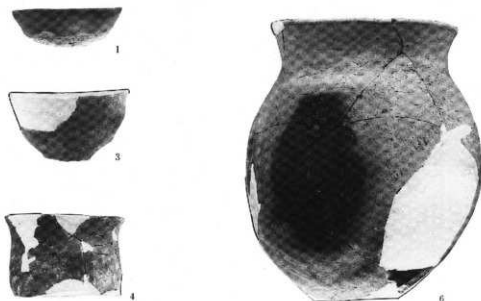


写真29 Ⅱ5号住居址出土遺物

(6) H 6号住居址

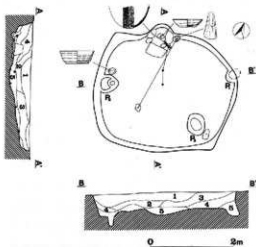
奈良時代

H 6号住居址は、第Ⅱ区E・け7グリッドより検出された。

本住居址の平面形態は、南北2.9m、東西3.4mの楕円形に近い隅丸方形を呈し、床面積が7.2㎡の小形住居である。主軸方向はN-15°-Wを指す。壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は32~42cmを測る。床面の状態は不安定である。

主柱穴は2個（P1・P2）が東西壁の中央部に対称的に配置されていた。P1は壁に斜めに穿たれたもので、25×33cm、深さ17cm程度を測る。P2は2段の掘り込みからなり、44×57cm、深さ36cmを測る。また、南東隅で53×40cm、深さ11cmのP3が検出されている。

住居覆土は5層の堆積で把握したが、ロームブロックの混入の在り方から、人為的に埋め戻されていた可能性が高い。1層はバミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土、2層はバミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、3層はバミス・ロームブロックを含む暗褐色土、4層はバミス・ローム粒子を含む褐色土、5層は黒色土である。



第30図 H 6号住居址実測図（1：80）



写真30 土器4出土状態

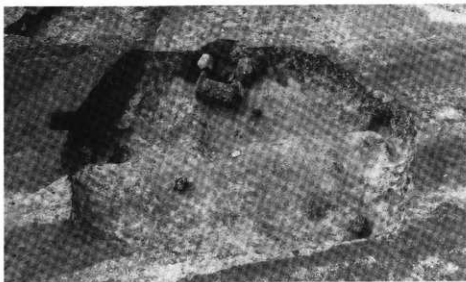


写真31
H 6号住居址

カマド

北壁中央部に構築されていた。煙道部は半円形状の掘り込みである。袖部の構築には、面取りした軽石と須恵器大甕の破片が用いられていた。左袖では、壁をビット状に掘り込む。そこに大形の軽石を埋め込み、さらにその軽石を須恵器甕の大形破片で覆う。その手前に小形の軽石を据える。という構築方法がみられた。

一方、右袖では、壁に接して大形の軽石2個を併設し、その前方に据えられた軽石との隙間を埋めるように須恵器甕の小破片3個が立てられていた。また、火床部には支脚石(6)が据えられていた。以上の袖石、支脚石を固定する際に用いられた埋土は、基本的に褐色土(③層)であった。なお、手前に横たわっていた大形長方形の集塊岩は天井石であったと考えられる。

覆土には、構築材に用いられたと考えられる橙色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色土(①層)、炭化物を含む黒褐色土(②層)の堆積がみられた。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器環・甕である。

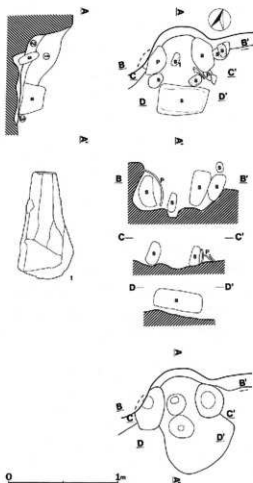
須恵器環では、底部が回転糸切りで未調整のもの(1・2)、回転糸切りの後に持ちへラケズリが施されているもの(3)が検出されている。1はカマド内、2は南東隅の1層、3はI区1層の出土である。

4は器高が高く口径の大きい須恵器高台付坏で、P2層の4層から検出された。

5は丸底を呈する須恵器甕で、カマド袖部とカマド手前の床面に分布した破片が接合したものである。

6・7は軽石を加工した支脚石で、6はカマドに設置されていたものであり、7はカマド右袖にあった上半部とⅢ区床面に分布していた下半部が接合したものである。

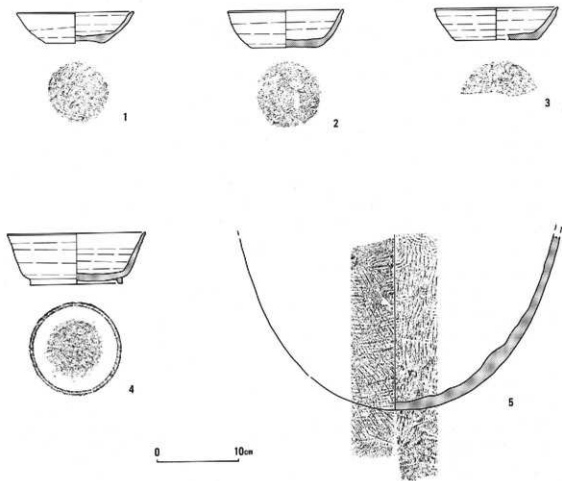
本址の土器群は、須恵器環・須恵器高台付坏の特徴から、八世紀第Ⅳ半期～九世紀初頭の土器様相と把握されよう。



第31図 H6号住居址カマド実測図(1:30)



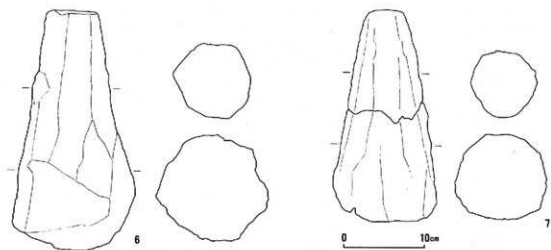
写真32 H6号住居址カマド



第32図 H6号住居址出土土器(1:4)

表9 H6号住居址出土土器観察表

調査 番号	種別	器形	高さ	底径	口径	式形	内面	外面	断面	色調	出土位置	備考
1	須恵器	杯	14.4 7.5 3.5	口径5/8 底径定形	ワタロ	→底面回転糸切り	内面: 7.5Y R6/4 外面: 2.5Y R6/4 断面: 7.5Y R6/3			カマド	大塚あり	
2	須恵器	杯	14.2 8.4 4.5	口径3/4 底径定形	ワタロ	→底面回転糸切り	内面: 5Y5/1 外面: 5Y5/1 断面: 2.5Y6/2			Ⅴ区1層	大塚あり	
3	須恵器	杯	[14.9] [10.0] 4.9	口径1/8 底径3/8	ワタロ	→底面回転糸切り 外面: 底面手持ちヘラケズリ	内面: N5/0 外面: 2.5G Y5/1 断面: N5/0			Ⅰ区1層	大塚あり	
4	須恵器	杯	16.9 11.3 6.3	口径4/5 底径定形	ワタロ	→底面回転糸切り→高合輪付 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 2.5Y R5/4 外面: N4/0 断面: 2.5Y R4/1			Ⅱ区4層		
5	須恵器	甕	— (21.3)	底径定形	ワタロ	内面: 同心円文→写き目→底面ケデ(刷毛状工具) 外面: 写き目	内面: 7.5Y6/1 外面: 7.5Y7/1 断面: N7/0			カマド横 Ⅰ区床面		



第33圖 H 6号住居址出土石器 (1:4)

表10 H 6号住居址出土石器観察表

器物番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
6	支障石	礫石	29.4	15.1	13.9	1400	カマヤ	
7	支障石	礫石	25.0	12.9	11.2	970	カマヤ地 首区東面	

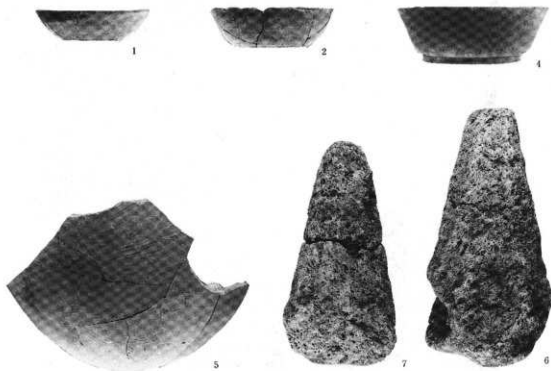


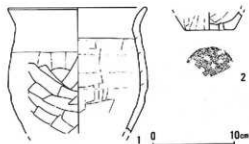
写真33 H 6号住居址出土遺物

(7) H 7号住居址

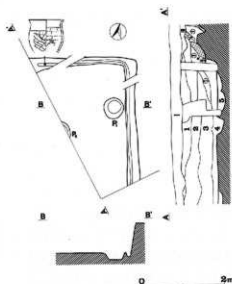
古墳時代

H 7号住居址は、第Ⅱ区Jい8・9グリッドにおいて検出された。大半が発掘区外にあり、北東隅の調査に止まった。また、耕作溝で壁・床面が一部破壊されている。平面形態は隅丸方形を呈したと思われる。Ⅲ層中から掘り込まれており、壁は100度の急傾斜で立ち上がる。壁高は70cm程を測る。幅8～13cm、深さ3～13cmのU字状をなす周溝が壁直下を巡る。床面はロームを混ぜた黒色土（5層）で貼られていた。ピットは東壁際のP 1（51×48cm、深さ17cm）と主柱穴と考えられるP 2の一部が確認された。なお、Aセクションでカマドの覆土が確認されており、カマドは北壁中央に位置し、白色粘土を構築材に用いたものと想定される。覆土は黒褐色土（1・2層）、暗褐色土（3層）、褐色土（4層）である。また、カマド部分に白色粘土ブロックを含む灰黄褐色土（①層）、褐色土（②層）がみられた。

出土した遺物は少ないが、古墳時代後期の土器と考えられる土師器甕（1）がカマド①層から、多孔の土師器甕底部破片（2）が3層から出土している。



第35図 H 7号住居址出土土器（1：4）



第34図 H 7号住居址実測図（1：80）



写真34 H 7号住居址



写真35 H 7号住居址出土遺物

表11 H 7号住居址出土土器観察表

発掘番号	種類	器形	容量	残存	成形	裏	底	色調	出土位置	備考
1	土師器	甕	(16.8) (15.3)	口縁1/4	赤ロタロ	内面：裏部ヘラナゲ・口縁コナゲ 外面：裏部ナゲ後ヘラナゲリ・口縁コナゲ		内面：5 Y R7/4 外面：5 Y R7/4 断面：5 Y R7/4	カマド①層	
2	土師器	甕	(5.8) (2.2)	底面1/3	赤ロタロ	内面：ヘラナゲ 外面：裏部ナゲ・底面ヘラナゲリ		内面：2.5 Y R6/2 外面：N4/0 断面：2.5 Y R6/2	3層	

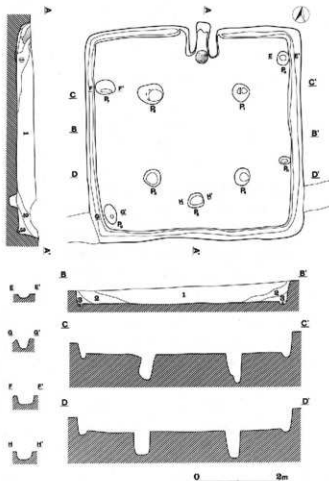
(8) H 8 号住居址

古墳時代

H 8 号住居址の検出位置は、第Ⅱ区 E け・こ 9 グリッドである。M 1 号溝状遺構によって壁の一部が破壊されている。

平面形態は、南北 5.1m、東西 5.2m の整った隅丸方形を呈し、床面積は 24.5m² である。主軸方向は N-12°-W を指す。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高 30~50cm 程で、西壁が浅い。これは農道による削平に起因する。壁直下に幅 10~24cm、深さ 2~12cm の周溝が全周する。

主柱穴は 4 個 (P 1~P 4) で規則的な配置をなす。P 1 は 44×42cm、深さ 71cm、P 2 は 50×62cm、深さ 63cm、P 3 は 43×41cm、深さ 55cm、P 4 は 43×38cm、深さ 67cm を測る。また、南壁中央部に 34×40cm、深さ 20cm の出入口部関連のピットと思われる P 5 が確認されている。さらに、33×30cm、深さ 11cm の P 6 と 20×28cm、深さ 18cm の P 9 が東壁際に間隔をあけて並び、36×47cm、深さ 21cm の P 7 と 49×28cm、深さ 23cm の P 8 が西壁際に間隔をあけて並んでいた。両者の位置関係は南北にずれるが、ピット間の間隔は東西壁ではほぼ同じである。



第36図 H 8 号住居址実測図 (1 : 80)

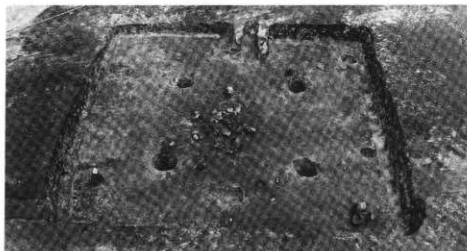


写真36
H 8 号住居址

覆土は、周溝の堆積が黒褐色土の4層であり、壁際の堆積に褐色土の2層と黒色土の3層がみられた。なお、住居中央の堆積は暗褐色土の1層のみであった。

カマド

北壁中央に位置する。農道により削平されていたが、地山造り出しの袖部が馬蹄形状に残されていた。煙道部は壁を半楕円形状に緩い傾斜で掘り込んだものであろう。袖部には、灰白色粘土の付着が僅かにみられた。焚口部では、皿状の掘り方と、両袖先端に袖石埋め込み用と考えられる小ピットが確認された。

カマド覆土は、カマド上面から前面の床面までを覆う灰白色粘土ブロック・粒子を含む灰黄褐色土(①層)、天井部の崩落を示す灰白色粘土ブロック、カマド内を埋める褐色土(②層)、灰白色粘土粒子を含む灰黄褐色土(③層)、灰白色粘土粒子・炭化物片・灰を多量に含む灰黄褐色土(④層)である。なお⑤層は、灰白色粘土を多量に含む粘質土で、煙道部形成時に貼られた構材と思われる。

遺物

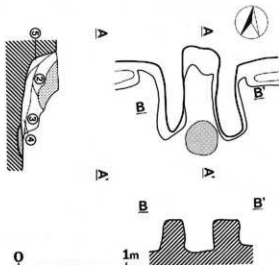
検出された主要遺物は、土師器杯・鉢・甕、土製勾玉、編物石である。また、住居中央部の床面には大小に割られた溶結凝灰岩の集石が存在していた(写真38)。火を顕著に受けたものも存在するが、カマド等に関連するものかどうかは定かではない。

1は底部近くに破を有し、内面が黒色処理された土師器杯の底部破片である。Ⅱ区1層から検出されている。

2は土師器小形鉢と考えられるもので、平底の底部には木葉痕を有する。南壁際周溝上部の3層から出土した完形品である(写真39)。

3はヘラミガキが施された土師器球胴甕の口縁部破片で、Ⅲ区1層から検出されている。

4は、球胴形を呈する土師器甕の底部破片と思われ、ヘラケズリ後にヘラミガキが施されてい



第37図 H 8号住居址カマド実測図(1:30)

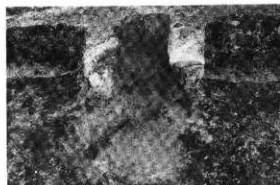
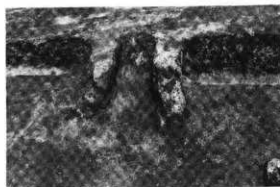
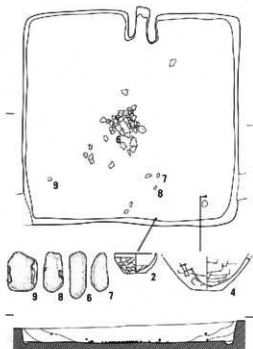


写真37 H 8号住居址カマド



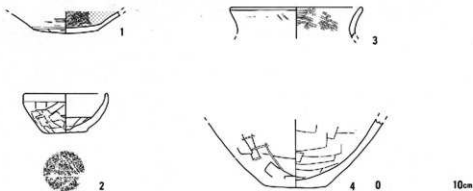
第38図 H 8号住居址遺物分布図



写真38 集石出土状態



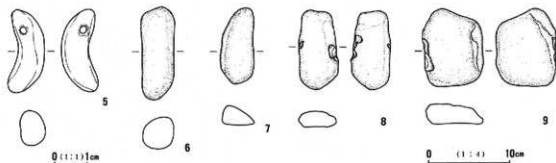
写真39 土器2出土状態



第39図 H 8号住居址出土土器 (1:4)

表12 H 8号住居址出土土器観察表

押出番号	種別	器形	数量	残存	成形	質	色調	出土位置	備考
1	土器器	杯	— (8.2) (2.7)	底面1/4	滑コタテ	内面:ヘラミガキ→黒色丸瓦 外面:体部ヨコナデ・底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5Y R6/4 断面:10Y R6/3	F区1層	
2	土器器	鉢	10.3 5.3 4.9	完形	滑コタテ	内面:みこみ部ヘラナゲ→口縁ヨコナデ 外面:体部・底面ヘラケズリ後ナデ→口縁ヨコナデ	内面:5Y R4/1 外面:7.5Y R4/1	F区3層	木炭痕あり
3	土器器	蓋	(16.2) — (3.8)	口縁1/4	滑コタテ	内面:口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面:口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	内面:10Y R4/1 外面:7.5Y R6/4 断面:7.5Y R6/4	F区1層	
4	土器器	蓋	— 7.4 (8.3)	底面完形	滑コタテ	内面:ヘラナゲ 外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面:5Y R6/4 外面:5Y R6/6 断面:5Y R6/6	F区2層	



第40図 H 8号住居址出土石器・土製品

表13 H 8号住居址出土石器・土製品観察表

器物番号	材質	形状	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備 考
5	勾玉	土製品	2.5	0.9	1.0	2.2	Ⅱ区1層	
6	礫物石	安山岩	11.4	4.2	4.0	280	Ⅱ区床面	
7	礫物石	流紋岩	9.4	4.3	2.3	120	Ⅱ区床面	
8	礫物石	輝石 安山岩	9.7	4.9	2.0	140	Ⅱ区床面	内側面に ノッチ状加工
9	礫物石	輝石 安山岩	9.6	7.5	2.5	200	Ⅲ区2層	一面面に ノッチ状加工

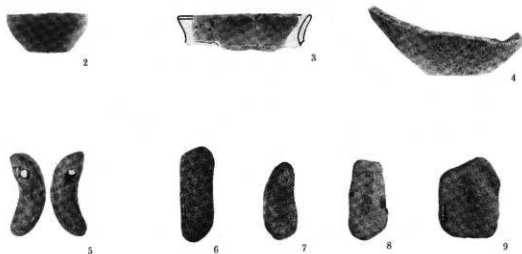


写真40 H 8号住居址出土遺物

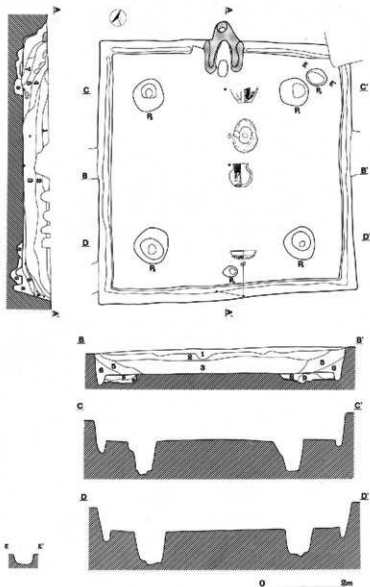
る。南東隅の2層から出土している。

5は、土製勾玉でⅡ区1層の出土。

6～9は礫物石と考えられる河原石である。6・7には加工・使用痕はみられないが、8では両側縁の表裏面に、9では一側縁の表裏面にノッチ状の加工が施されている。6は集石内に含まれ、

7・8はⅡ区の床面、9はⅢ区の2層から出土している。

以上のように、H 8号住居址から検出された遺物は少ないが、土器器環・甕の特徴は、古墳時代後期の土器様相と理解でき、カマドの構造も古墳時代後期の在り方を示している。



第41図 H9号住居址実測図(1:80)

H9号住居址は、第Ⅱ区Eき・く8・9グリッドより検出された。北東コーナーがH10号住居址で破壊され、東西壁中央上部がM1号溝状遺構によって、西壁南端上部がM2号溝状遺構によって破壊されている。

平面形態は、南北6.3m、東西6.1mの方形を呈

する。床面積は約33.7㎡であり、本遺跡検出の堅穴住居址では最大規模を有する。主軸方向はN-13°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は最大68cmを有する。壁直下に幅9~20cm、深さ10~31.5cmの深い周溝が存在し、北西隅を除いて全周

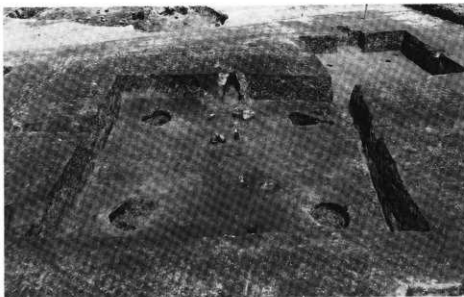


写真41 H9号住居址

する。形状はU字形を呈するが、床面からの掘り込みは垂直である。

床面は中央部がローム面、周辺部が黒色土（9層）とロームを混ぜた黒色土（8層）で構築されている。

主柱穴は4個（P1～P4）で、やや壁よりに等間隔に配置されている。掘り方は大形で2段の掘り込みからなる。P1は70×70cm、深さ72cm、P2は78×75cm、深さ80cm、P3は87×82cm、深さ81cm、P4は80×75cm、深さ64cmを測る。また、南壁中央部で27×36cm、深さ21cmの出入口部関連のピットと思われるP5が確認されている。41×52cm、深さ24cmのP6はP1北脇に位置する。

住居覆土は、6層の黒色土、5層のロームブロックを含む黄褐色土、4層のロームブロックを含む黒褐色土が壁際を埋める覆土であり、住居中央は、1層のローム粒子・パミスを含む暗褐色土、2層のローム粒子・パミスを含む暗褐色土、3層のロームブロック・パミスを含む褐色土の堆積である。なお、1・2層には溝状遺構の他に、耕作の攪乱が部分的に及んでいた。

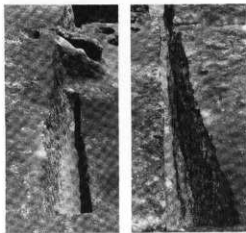
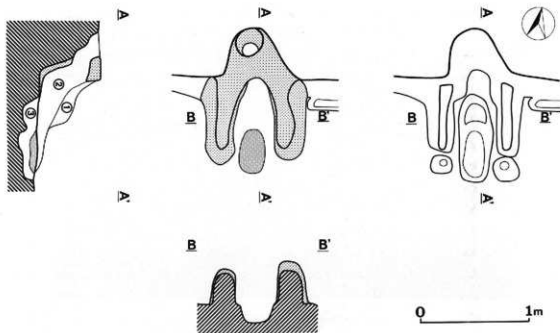


写真42 H9号住居址周溝



写真43 土器1出土状態



第42図 H9号住居址カマド実測図(1:30)



写真44 H9号住居址カマド

カマド

北壁中央部に構築されていた。焚口～煙道部までの長さは140cm、幅は90cm程である。

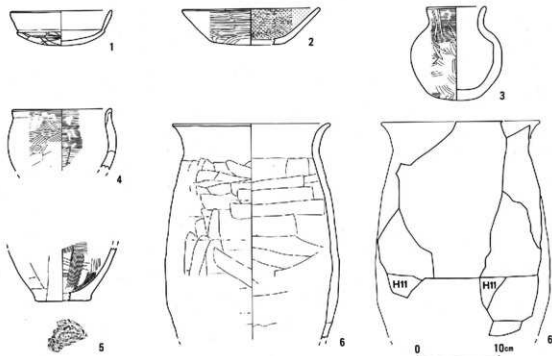
煙道部は、舟先状の2段の掘り込みからなり、煙道立ち上がり部には橙色粘土が貼られていた。

袖部は、地山を馬蹄形に削り出して芯としたものである。天井部の大半は崩落していたが、袖部から煙道部上面に貼られた橙色粘土が一部残存していた。また、両袖先端部では袖石を埋め込むために掘られたと考えられる小ビットが確認された。

火床面には、長楕円形の掘り方があり、ルーム

と黒褐色土の混合土(③層)で貼られていた。

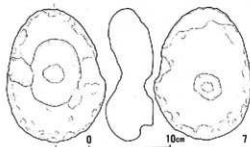
覆土の在り方は、カマド上面から前面の床面に大形の橙色粘土ブロックを含む黄褐色土(5層)の堆積がみられ、カマド前面には褐色土(7層)の堆積、カマド内では、上面に橙色粘土粒子を多量に含む褐色土(①層)、内部に黄褐色土(②層)の堆積がみられた。なお、H2号住居址のカマドの在り方を、本遺跡での古墳時代後期の典型的な構築方法と理解すると、焚口の袖石、天井石が取り除かれた状態にある本址のカマドは、破壊されたものと考えられ、それに対応するように、袖石・



第43図 H9号住居址出土土器(1:4)

表14 H9号住居址出土土器観察表

採出番号	器別	器形	数量	残存	形状	質	色	刺	出土位置	備考
1	土師器	杯	12.4 10.6 4.3	口縁9/10 底面欠形	非コナダ	内面:みこみ形ナデ→口縁コナダ 外面:口縁コナダ→底面ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面:2.5Y R6/8 外面:2.5Y R5/6 断面:5Y R7/6		Ⅱ区4・5層	
2	土師器	杯	10.7 (8.3) 4.5	口縁1/4 底面1/3	非コナダ	内面:ヘラミガキ→黒色処理 外面:口縁コナダ・底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5Y R5/4 断面:7.5Y R5/7		Ⅲ区床面	
3	土師器	甕	(7.2) 11.5	口縁1/2 底面欠形	非コナダ	内面:口縁コナダ・胴部→底面ヘラナデ 外面:口縁→底面コナダ(刷毛状工具)・胴部→底面ナデ→ヘラミガキ	内面:7.5Y R5/8 外面:7.5Y R6/9 断面:5Y R6/8		Ⅰ区床面	
4	土師器	甕	(12.1) — (7.5)	口縁1/4	非コナダ	内面:口縁コナダ・胴部刷毛目 外面:口縁コナダ→胴部刷毛目	内面:10Y R7/4 外面:10Y R5/9 断面:2.5Y R6/4		Ⅲ区床面	
5	土師器	甕	(6.7) (6.4)	底面1/2	非コナダ	内面:刷毛目 外面:ナデ	内面:10Y R4/1 外面:2.5Y R5/3 断面:10Y R8/3		Ⅰ区床面	木炭灰あり
6	土師器	甕	(19.2) — (28.3)	口縁1/10 胴部1/4	非コナダ	内面:口縁コナダ・胴部ヘラナデ 外面:口縁コナダ・胴部ナデ	内面:7.5Y R4/1 外面:7.5Y R6/4 断面:10Y R6/3	キヤク遺 Ⅱ区床面 Ⅲ区Ⅱ区1層	Ⅲ区と接合	



第44図 H9号住居址出土石器(1:4)

表15 H9号住居址出土石器観察表

採出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
7	凹石	礫石	18.3	12.6	5.9	420	Ⅰ区3層	

天井石に関連すると思われる安山岩がカマド手前の床面に存在していた。

遺物

H9号住居址は大形の住居址であったが、検出された遺物量は極めて少なかった。主要遺物としては土師器環・壺・甕、凹石が検出された。

土師器環には、外稜を体中央部に有し、口縁部が直線的に外反する須恵器模倣環（1）、平底を呈し、底部と体部の境に稜を有して体部が外反する内面黒色処理の環（2）がみられた。1は南壁中央部の4・5層の堆積に即して（写真43）、破片が分布していたものであり、2はⅢ区の床面から検出されている。

3は小形の土師器壺と考えられるもので、住居

中央部の床面から出土したものである。

土師器甕には、Ⅱ区床面から検出された口縁部が短く外反し、胴の委る小形甕（4）、カマド手前の床面から出土した木葉痕を有する球胴甕の底部破片（5）、破片がカマド内からカマド左脇の床面に分布していた肉厚の長胴甕（6）があった。なお、6の長胴甕には、H11号住居址1層から出土した胴部破片2点が接合している。

7は軽石を利用した凹石で、表面に皿状、裏面に小さな凹部を有する。出土位置は住居中央の3層である。

以上のように、H9号住居址から検出された遺物は少ないが、土師器環・長胴甕の特徴は、古墳時代後期の土器様相と考えられる。

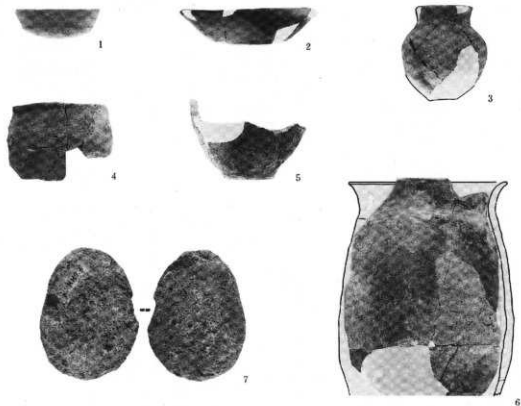


写真45 H9号住居址出土遺物

(10) H10号住居址

奈良時代

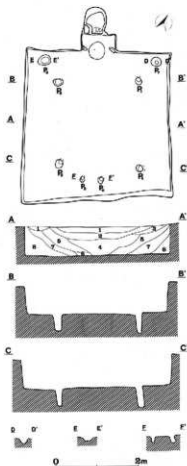
H10号住居址は、第Ⅱ区Eき7・8グリッドより検出された。

平面形態は、コーナーが直角に近い方形を呈し、南北3.7m、東西3.5mを測る。床面積は12.2㎡である。主軸方向はN-25°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は68~75cmと深い。周溝は認められない。

主柱穴は4個で、小形円形を呈するP1~P4が規則的に配置されていた。P1は17×16cm、深さ45cm、P2は17×25cm、深さ39cm、P3は21×18cm、深さ39cm、P4は16×17cm、深さ51cmを測る。また、南壁中央際では、P5・P6が並存していた。共に住居中央側に斜めに掘り込まれており、出入口施設に関わるものであろう。P5は13×12cm、深さ15cm、P6は16×13cm、深さ17cmを測る。また、北東隅と北西隅の対称的な位置に、22×24cm、深さ13cmのP7と25×32cm、深さ9cmのP8が確認された。

住居覆土は、ブロック単位の土層が繰り返して堆積した状態を示していた。便宜的に次の8層に分層したが、本住居址は廃絶後に人為的に埋め戻されたと考えられる。



第45図 H10号住居址実測図(1:80)

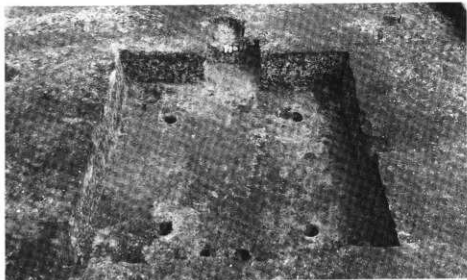


写真46
H10号住居址

1層は暗褐色土。2層はにぶい黄褐色土。3層は暗褐色土。4層は黒褐色土。5層はパミス、ロームブロック、黒色土ブロックを含むにぶい黄褐色土。6層は黒色土。7層はロームブロックを多量に含む暗褐色土。8層は暗褐色土とローム・パミス主体の褐色土の互層である。

カマド

燃焼部は、40×80cm程の規格的な長方形を呈し、北壁中央部の壁外に設置されていた。

煙道部は、燃焼部との境に段を設け、60×50cm程の半楕円形の掘り込みで形成されていた。また、燃焼部との境には須恵器甕の破片3点が設置されていた。火床面では径40cm、厚さ10cm程の焼土の堆積がみられ、袖部では2個の小ビットが壁境の対称的な位置で検出された。

カマド覆土は、構材の橙色粘土ブロック・パミス・ロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色土(①層)、橙色粘土ブロック・パミスを含む黒褐色土(②層)、煙道部を埋める黒色土(③層)、橙色粘土ブロック・炭化物片を含むにぶい黄褐色土(④層)であった。

遺物

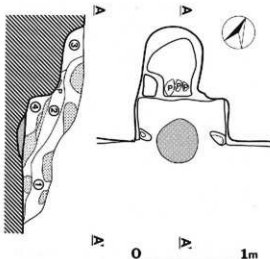
本住居址は埋め戻されていたため、遺物の出土量は極めて少なかったが、カマドを主体に須恵器の坏、土師器の甕が検出された。

1は、手持ちヘラケズリで底部が調整された須恵器坏で、カマド内の覆土から検出された。

2・3は、口縁が「く」の字状に外反する土師器長胴甕である。2はカマド内の覆土とⅡ区の8層に破片が分布していたもので、3はカマド内の覆土から検出された。

4は、扁平な円筒状を呈する「枕」形の土製品である。H3号住居址のものよりは小形で、整形は輪積、叩き締めである。出土位置はカマドであるが、設置された状況は何えなかった。

本住居址検出の須恵器坏・土師器長胴甕の特徴と組成は、八世紀第1四半期の土器様相と考えられよう。



第46図 H10号住居址カマド実測図(1:30)

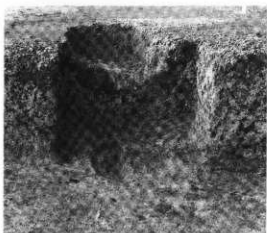
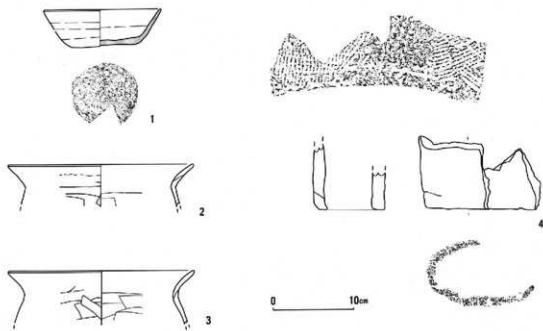


写真47 H10号住居址カマド



第47図 H10号住居址出土土器 (1:4)

表16 H10号住居址出土土器観察表

発掘 番号	種別	器形	口径	底径	高さ	形状	調査	色調	出土位置	備考
1	深鉢	杯	14.3 8.0 4.8	口径1/2 底径7/8	—	コナシ	・底面切り差し(切り差し方不明) 外面: 武蔵守持もヘラケズリ	内面: N6/0 外面: N6/0 断面: N6/0	カマド	
2	土師器	盤	(22.8) — (5.2)	口径1/3	—	滑コナシ	内面: 口縁コナデ・胴部ヘラナデ 外面: 口縁コナデ・胴部ヘラケズリ	内面: 2.5Y R6/0 外面: 5Y R6/4 断面: 10Y R7/4	カマド E区8層	
3	土師器	盤	(22.7) — (6.7)	口径1/4	—	滑コナシ	内面: 口縁コナデ・胴部ヘラナデ 外面: 口縁コナデ・胴部ヘラケズリ	内面: 5Y R6/0 外面: 5Y R5/2 断面: 5Y R7/6	カマド	
4	土師器	—	— — (8.8)	—	—	滑コナシ	内面: ナデ 外面: ナデ後叩き目	内面: 10Y R6/4 外面: 10Y R7/4 断面: 10Y R7/4	カマド	

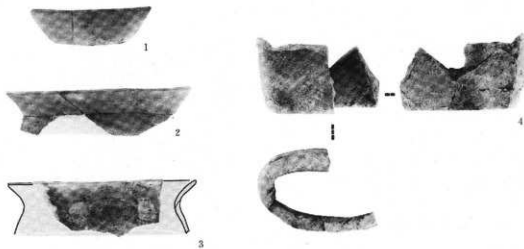


写真48 H10号住居址出土遺物

(11)H11号住居址

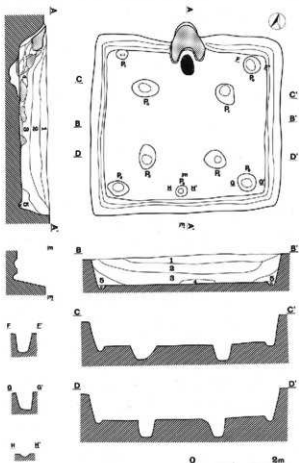
古墳時代

H11号住居址は、第Ⅱ区Bか10グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.3m、東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積は16.3㎡である。主軸方向はN-14°-Wを指す。

壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は62~67cmである。壁直下に幅10~26cm、深さ6~13cmのU字形を呈する周溝が全周する。

主柱穴は、規則的に配置された4個（P1~P4）である。掘り方はやや大形で、P1は52×46cm、深さ38cm、P2は42×66cm、深さ31cm、P3は59×40cm、深さ41cm、P4は43×55cm、深さ44cmを測る。また、南壁中央部に、26×28cm、深さ7cmを測る出入口部関連のピット（P5）が確認されている。さらに、四隅の均等な位置からP6~P9の4個のピットが検出されている。北東隅のP6は41×42cm、深さ46cmで、南東隅のP9は43×45cm、深さ42cmである。両者は同等の規模を有する。南西隅のP8は37×52cm、深さ19cmで、平面規模でP6・P9と同等であるが、



第48図 H11号住居址実測図（1：80）

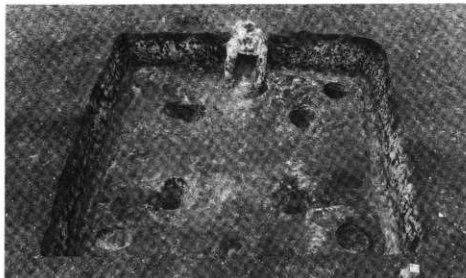


写真49
H11号住居址

深さは浅い。北西隅のP7は23×29cm、深さ12cmと小形で浅いものである。

住居覆土は、暗褐色土（6層）が周溝を埋め、黒色土（5層）が煙跡を埋める。住居全体はバミスを多量に含む褐褐色土（1層）・暗褐色土（2層）、黒褐色土（3層）の堆積である。なお、カマド上面から住居中央部の床面までの広範囲に、大形の灰白色粘土ブロックを多量に含む褐灰色土（4層）の分布がみられた。

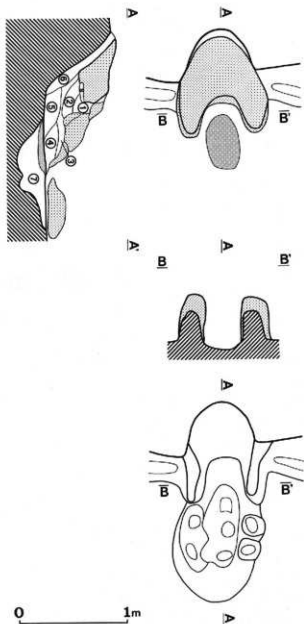
カマド

北壁中央部に位置する。煙道部は半円形状の緩傾斜の掘り込みである。袖部は地山で造り出されたものである。両袖部先端には小ピットがそれぞれ2個確認されている。この在り方は、焚口部を形成する袖石が存在していたことを推定させる。袖部から煙道部にかけて灰白色粘土が貼られた状態で残り、天井部下底に板状礫1個が残されていた。しかし、かなりの量の粘土ブロックが、カマド前面に崩落、流出した状態で分布していることから、上記の在り方が構築時の状態を直接的に示しているものとは断言できない。逆に、袖石が抜き取られた可能性が高いことから、本カマドは破壊されたものと考えられる。なお南壁脇に焼けた大形長方形の安山岩礫2点が分布し、これらは天井石に用いられていた可能性が指摘できる。

カマド内の覆土は、細分すれば褐色土（①層）、灰褐色土（②層）、暗褐色土（③層）、炭化物片を多く含む明黄褐色土（④層）・褐色土（⑤層）、煙道部を埋める暗褐色土（⑥層）、火床面の長楕円形の掘り方を貼ったローム混入の黒色土（⑦層）である。

遺物

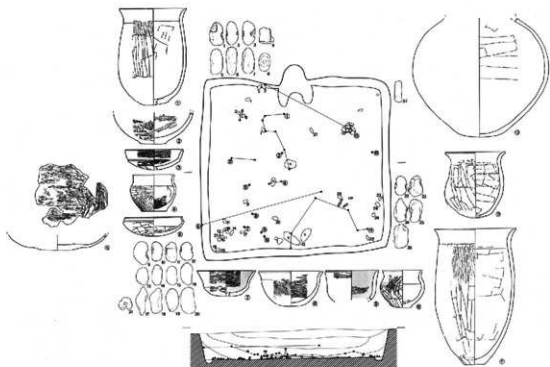
遺物は、古墳時代後期の土器様相を顕著に示す土器器坏・鉢・壺と編物石、凹石、紡錘車が検出されている。



第49図 H11号住居址カマド実測図（1：30）



写真50 H11号住居址カマド



第50図 H11号住居址遺物分布図

土師器杯には、稜を上部に有し口縁部が短く内傾する須恵器模倣杯（1）、稜を中央部に有し口縁部が外傾する杯（2）、稜を下部に有し口縁部が外湾する内面黒色処理の杯（3）がある。1はⅤ区2層と西壁5層出土の破片が接合したもので、2はⅢ区3層、3は西南隅床面から検出された。

4・5は、ヘラミガキが施された土師器鉢である。4は内面黒色処理が施され、杯と同様な調整を見せる。西南隅の床面（5）と3層（4）から検出されている。

土師器甕には、平底で球胴を呈する小形甕（6・7）、大小の長胴甕（8～10）、ヘラミガキが施された球胴甕（11～14）がある。6は南西隅5層、7は住居中央床面、8は東壁脇の5層から検出されている。9はカマド手前から住居中央の4層中に破片が分布していたもの。10は南東隅の3・5層中に破片が分布していたものである。11はⅠ区3層、12は住居中央3層の出土。13はⅠ区1層の床面に破片の集中部がみられたもの。14はⅢ区3層に破片が分布し、H12号住居址から出土した2点

の小破片が接合したものである。

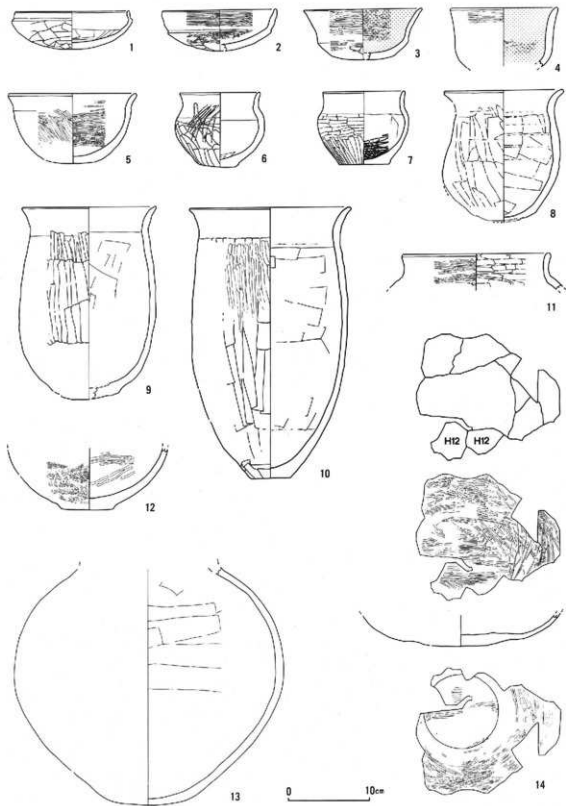
15～23は側縁の両方あるいは片方にノッチ状の加工が施されている。平均重量は376gである。分布には南西隅、北西隅、南東隅の3箇所の集中部が存在し、特に南西隅の集中は顕著であった。

42は軽石を用いた紡錘車で南西隅集中部に含まれていた。

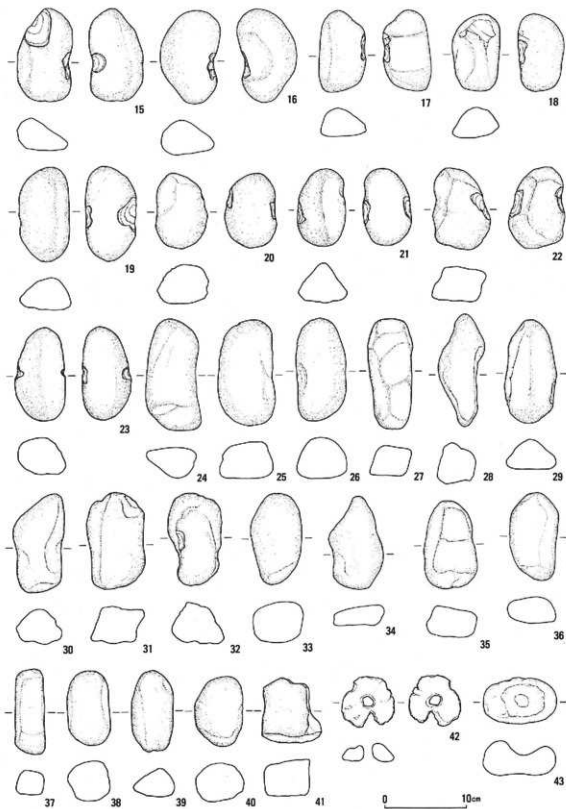
43は軽石を用いた凹石で北西隅の集中部から出土している。



写真51 編物石出土状態（西南隅）



第51图 H11号住居址出土土器(1:4)



第52图 H11号住居址出土石器(1:4)

表17 H11号住居址出土土器観察表

発見番号	種別	器形	直径	残存	状況	調	検	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	(14.0) 底径1/3 4.8	口縁～ 底径1/3	非ロタロ	内面:みこみ部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:体部→底径ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区5層 Ⅱ区2層		
2	土師器	杯	(14.0) 5.0	口縁1/3 底径完形	非ロタロ	内面:みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面:体部→底径ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区3層		
3	土師器	杯	(14.3) (7.8) 8.2	口縁2/3 底径1/2	非ロタロ	内面:口縁ヨコナデ→みこみ部ナデ→ヘラミガキ→黒色底径 外面:口縁ヨコナデ→体部→底径ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区表面		
4	土師器	鉢	(13.0) (7.3)	口縁1/5	非ロタロ	内面:ヘラミガキ→黒色底径 外面:ヘラミガキ	内面: 断面:	Ⅱ区3層		
5	土師器	鉢	(10.8) (7.0) 8.5	口縁1/3 底径3/4	非ロタロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部ナデ→ヘラミガキ 外面:口縁ヨコナデ→胴部→底径ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区表面		
6	土師器	甕	9.8 4.8 9.1	完形	非ロタロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ナデ→ヘラケズリ→口縁ヨコナデ →部分的にヘラミガキ	内面: 外面:	Ⅱ区5層		
7	土師器	甕	10.0 6.0 9.0	口縁1/4 底径完形	非ロタロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面:胴部ナデ→口縁ヨコナデ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区表面		
8	土師器	甕	14.4 (4.1) (15.9)	口縁1/4	非ロタロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部→底径ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部→底径ナデ	内面: 外面: 断面:	Ⅰ区6層		
9	土師器	甕	16.3 6.9 23.6	口縁完形 底径1/2	非ロタロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部→底径ナデ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区4層		
10	土師器	甕	19.6 4.6 33.1	口縁3/4 底径完形	非ロタロ	内面:胴部→底径ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ヘラケズリ→部分的にヘラミガキ →底径ナデ→口縁ヨコナデ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区5層 Ⅱ区3・5層		
11	土師器	甕	(18.0) — (4.5)	口縁1/4	非ロタロ	内面:ナデ 外面:ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅰ区3層		
12	土師器	甕	— 6.1 (7.7)	底径完形	非ロタロ	内面:ナデ→ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面: 外面:	Ⅱ区3層		
13	土師器	甕	— 8.5 (28.9)	底径7/10	非ロタロ	内面:ヘラナデ 外面:ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅰ区表面 Ⅱ区5層		
14	土師器	甕	(9.0) (3.8)	底径完形	非ロタロ	内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面: 外面: 断面:	Ⅱ区3層 Ⅱ区1区3層 Ⅱ区1区底出	H12と統合	

表18 H11号住居址出土石器観察表

発見番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	発見番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
15	磨物石	角閃石 安山岩	11.3	6.2	4.2	350	Ⅱ区4層	内面に ノッチ状加工	30	磨物石	角閃石 安山岩	15.1	6.2	4.4	440	Ⅱ区表面	
16	磨物石	輝石 安山岩	11.3	7.4	4.7	485	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	31	磨物石	角閃石 安山岩	11.9	7.9	4.9	520	Ⅱ区表面	
17	磨物石	石英 安山岩	9.9	5.9	4.7	300	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	32	磨物石	石英 安山岩	11.3	7.5	5.0	380	Ⅱ区表面	
18	磨物石	輝石 安山岩	9.4	5.7	4.0	280	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	33	磨物石	石英 安山岩	11.1	6.1	5.0	500	Ⅱ区表面	
19	磨物石	石英 安山岩	11.6	6.2	3.9	360	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	34	磨物石	安山岩	11.5	6.6	2.5	240	Ⅱ区表面	
20	磨物石	石英 安山岩	9.1	6.2	4.6	200	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	35	磨物石	安山岩	10.8	6.4	4.8	410	Ⅰ区2層	
21	磨物石	石英 安山岩	9.4	6.0	5.2	310	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	36	磨物石	角閃石 安山岩	10.7	5.8	5.9	320	Ⅱ区表面	
22	磨物石	輝石 安山岩	10.0	6.9	5.7	440	Ⅱ区表面	内面に ノッチ状加工	37	磨物石	輝石 安山岩	10.4	3.7	2.9	200	Ⅰ区4層	
23	磨物石	石英 安山岩	11.4	6.1	4.8	420	Ⅱ区4層	内面に ノッチ状加工	38	磨物石	石英 安山岩	9.1	5.4	4.9	340	Ⅱ区表面	
24	磨物石	角閃石 安山岩	13.6	6.8	4.0	460	P7		39	磨物石	輝石 安山岩	9.9	5.2	3.5	225	Ⅱ区表面	
25	磨物石	安山岩	12.3	7.0	5.0	580	Ⅱ区3層		40	磨物石	石英 安山岩	8.8	7.0	4.9	320	Ⅱ区3層	
26	磨物石	角閃石 安山岩	12.5	6.3	5.8	570	Ⅱ区4層		41	磨物石	流紋岩	8.0	7.3	4.8	440	Ⅱ区表面	
27	磨物石	安山岩	13.5	5.5	4.9	270	Ⅱ区表面		42	磨物石	輝石	6.2	6.4	2.2	20	Ⅱ区表面	孔径15mm
28	磨物石	安山岩	13.5	5.6	4.8	420	Ⅱ区表面		43	磨物石	石英	8.7	5.7	4.3	90	Ⅱ区表面	
29	磨物石	石英 安山岩	12.5	6.2	4.1	370	Ⅱ区4層										



写真52 H11号住居址出土土器



写真53 H11号住居址出土石器

(12) H12号住居址

古墳時代

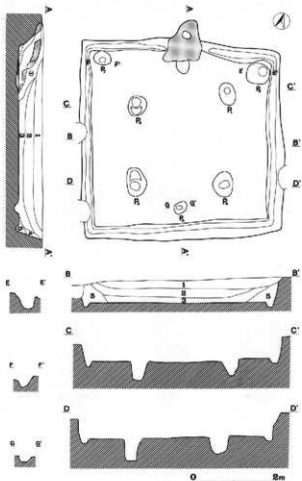
H12号住居址の検出位置は、第1区Pかき2グリッドである。西壁上部2箇所がP6号掘立柱建物址によって切れ、東壁上部1箇所がピットで切られている。

平面形態は、北東隅が不正形であるが、基本的に方形に近い隅丸方形を呈する。

南北4.8m、東西4.9mを測り、床面積は20.1㎡の規模を有する。主軸方向はN-10°-Wを指す。

壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は47~57cmである。壁直下に幅10~26cm、深さ2~19cmのU字形を呈する周溝が全周する。

主柱穴は4個（P1~P4）が規則的な配置で設定されている。P1は56×39cm、深さ41cm、P2は50×45cm、深さ47cm、P3は70×48cm、深さ53cm、P4は62×50cm、深さ45cmである。また、南壁中央部に26×34cm、深さ13cmの出入口部関連の小ピット（P5）が検出されている。さらに、東西隅の対称的な位置から、49×56cm、深さ38cmのP6と33×42cm、深さ26cmのP7が検出されている。



第53図 H12号住居址実測図（1：80）

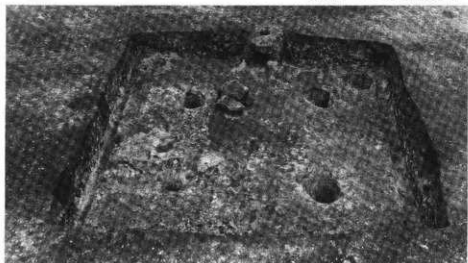
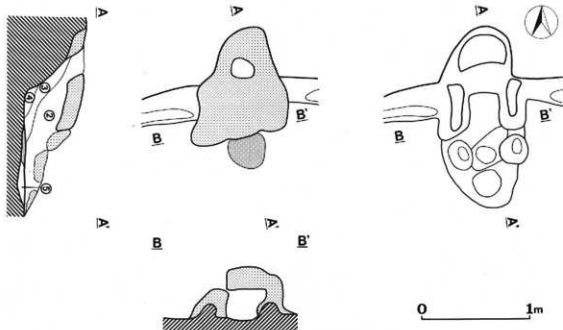


写真54
H12号住居址



第54図 H12号住居址カマド実測図(1:30)



写真55 H12号住居址カマド

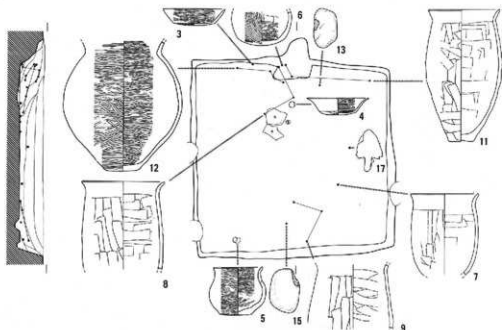
住居覆土は、褐色土(5層)が壁隙を埋め、南壁上部では黒色土(4層)の堆積がみられる。住居全体は暗褐色土(1層)、パミス・ルーム粒子を多量を含む暗褐色土(2層)、パミス・ルーム粒子を含む暗褐色土(3層)の堆積である。

カマド

北壁中央部に位置する。煙道部は、半円形状に緩やかな傾斜で掘り込まれ、壁外では僅かに断を有し、赤色粘土が貼られていた。袖部は、地山を掘り残して造り出されたものである。両袖部先端では、袖石を埋め込んだと考えられる小ピットが確認された。袖部には赤色粘土が貼られ、赤色粘

土で構築された天井部が一部残存していた。カマド前面には赤色粘土ブロックが崩落しており、袖石等が抜き取られたと考えられることから、狭口部は破壊されたと推定される。その状況として、天井石に用いられていたと考えられる安山岩の大形板状礫2点が、カマド前面に廃棄されていた。

カマドの覆土は、上面を赤色粘土粒子を多量に含む暗褐色土(①層)が覆い、カマド内は黒褐色土(②層)、奥壁に貼られた粘土の流出と考えられる暗赤褐色土(③層)、黒褐色土(④層)、火床面形成の浅い掘り込みを埋めた暗褐色土(⑤層)である。



第55図 H12号住居址遺物分布図

遺物

検出された主要遺物は、須恵器環・土師器環・甕、編物石、鉄鎌であり、土師器環・甕は古墳時代後期の土器様相を示している。

1は、須恵器高台付環で、底部は回転ヘラケズリで調整されている。Ⅱ区2層から出土している。

2は、底部切り離しが回転ヘラ切りによる須恵器環で、Ⅲ区1層の出土である。

3・4は土師器環で、平底ないし扁平な丸底を呈し、体部が外傾ないし外反するものであり、内面黒色処理はみられない。3はカマド西脇の周溝上面から検出され、4はカマド手前の床面から出土している。

5・6は、ヘラミガキで調整された球胴を呈する小形甕である。5は完形品で南西隅の5層から検出されている(写真56)。6はカマド内②層とⅠ区3層に破片が分布していたものである。

7～11は長胴甕である。7は小形でⅢ区3層から出土している。8はカマド内②層からカマド前面の①層に破片が分布していたものである。9は南壁際の3層中に破片が分布していたものである。

10は底部破片が①層からⅡ・Ⅲ区1層に分布していた。11は全体の形状が知れるもので、カマド内②層に破片の集中がみられたものである。

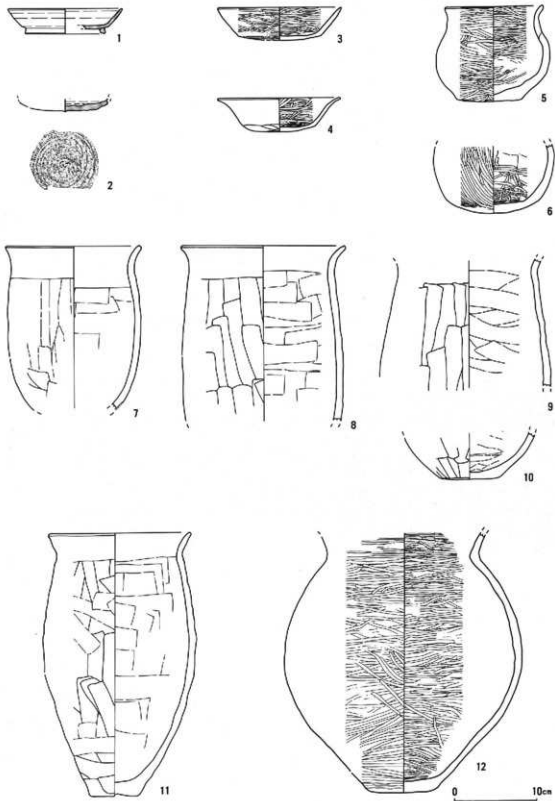
12は内外面ともヘラミガキで調整された球胴形の甕で、カマド西脇の①層を主体に破片で分布していたものである。

13～16は編物石と考えられるものである。13には側縁にノッチ状の加工が施されている。分布では14・16が1層中のものであり、集中的な出土状態ではない。

17は鉄鎌で、Ⅰ区2層から出土したものである。



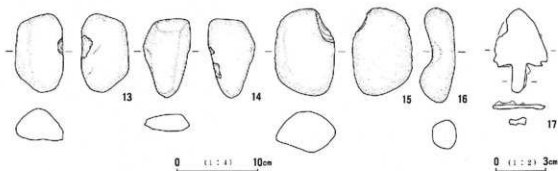
写真56 土器5出土状態



第56图 H12号住居址出土土器(1:4)

表19 H12号住居址出土土器観察表

検出番号	種別	器形	数量	保存	成形	調査	位置	色調	出土位置	備考
1	須恵器	杯	(13.8) (9.8) 3.1	口縁1/5 底面1/4	コクロ	-底面切り離し(切り離し方不明)→両面削付 外面:底面回転ヘラケズリ		内面: N5/0 外面: 10GY5/1 断面: N3/0	Ⅱ区2層	
2	須恵器	杯	— (1.3)	底面破片	コクロ	→底面回転ヘラ削り		内面: 7.5Y R5/1 外面: 2.5O Y3/1 断面: 10Y R3/1	Ⅱ区1層	
3	土師器	杯	15.0 9.9 4.6	口縁1/2 底面完整	赤コクロ	内面: ヘラミガキ 外面: 口縁ココナダ・底面ヘラケズリ→ヘラミガキ		内面: 10Y R5/3 外面: 10Y R5/3 断面: 10Y R5/1	Ⅱ区床面	
4	土師器	杯	15.0 8.1 4.4	口縁2/3 底面完整	赤コクロ	内面: 口縁ココナダ・底面ナダ→ヘラミガキ 外面: 口縁ココナダ→底面ヘラケズリ		内面: 7.5Y R7/6 外面: 5Y R7/6 断面: 7.5Y R6/3	Ⅱ区床面	
5	土師器	壺	11.9 7.9 11.5	完整	赤コクロ	内面: ヘラミガキ 外面: ヘラミガキ		内面: 5Y R5/2 外面: 2.5Y R5/6 断面: 7.5Y R6/4	Ⅱ区5層	
6	土師器	壺	— (8.3)	底面2/5	赤コクロ	内面: ヘラナダ→ヘラミガキ 外面: ヘラケズリ→ヘラミガキ		内面: 5Y R6/6 外面: 7.5Y R6/6 断面: 7.5Y R6/4	ホマド区層 Ⅰ区3層	
7	土師器	壺	15.5 — (19.8)	口縁1/2	赤コクロ	内面: 胴部ヘラナダ→口縁ココナダ 外面: 胴部ナダ後胴部下半ヘラケズリ→口縁ココナダ		内面: 2.5Y R5/6 外面: 2.5Y R5/6 断面: 3Y R7/4	Ⅱ区3層	
8	土師器	壺	20.0 — (21.4)	口縁2/5	赤コクロ	内面: 胴部ヘラナダ→口縁ココナダ 外面: 胴部ヘラケズリ→口縁ココナダ		内面: 7.5Y R4/3 外面: 3Y R5/4 断面: 5Y R6/4	ホマド Ⅰ・Ⅱ層	
9	土師器	壺	— — (15.6)	胴部・胴 上部完整	赤コクロ	内面: 口縁ココナダ→胴部ヘラナダ 外面: 口縁ココナダ→胴部ヘラケズリ		内面: 10Y R3/2 外面: 10Y R3/2 断面: 3.5Y R7/6	Ⅱ区3層	
10	土師器	壺	(7.2) (5.7)	底面1/3	赤コクロ	内面: ヘラナダ 外面: ヘラケズリ		内面: 3Y R5/4 外面: 7.5Y R5/4 断面: 2.5Y R7/6	ホマド区層 Ⅰ・Ⅱ区1層	
11	土師器	壺	(17.2) (11.2) 6.9 32.2	口縁2/5 底面完整	赤コクロ	内面: 口縁ココナダ・胴部→底面ヘラナダ 外面: 胴部・底面ヘラケズリ・部分的にナダ→口縁ココナダ		内面: 10Y R5/2 外面: 10Y R5/4 断面: 7.5Y R6/6	ホマド区層 Ⅰ区5層	
12	土師器	壺	8.1 — (31.7)	底面完整	赤コクロ	内面: ヘラミガキ 外面: ヘラミガキ		内面: 7.5Y R7/6 外面: 7.5Y R6/4 断面: 3Y R7/6	ホマド区層 Ⅱ区5層	



第57図 H12号住居址出土土器・鉄器

表20 H12号住居址出土土器・鉄器観察表

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
13	編物石	角閃石 安山岩	9.7	9.0	4.0	290	Ⅰ区1層	製法に ノッチ状加工
14	編物石	輝石 安山岩	9.7	5.9	2.1	160	Ⅰ区1層	
15	編物石	石英 安山岩	10.7	7.5	5.0	386	Ⅱ区3層	
16	網物石	角閃石 安山岩	11.5	4.5	3.5	200	Ⅰ区1層	
17	鉄鏃	鉄	(5.1)	3.2	0.3	(18.8)	Ⅰ区2層	

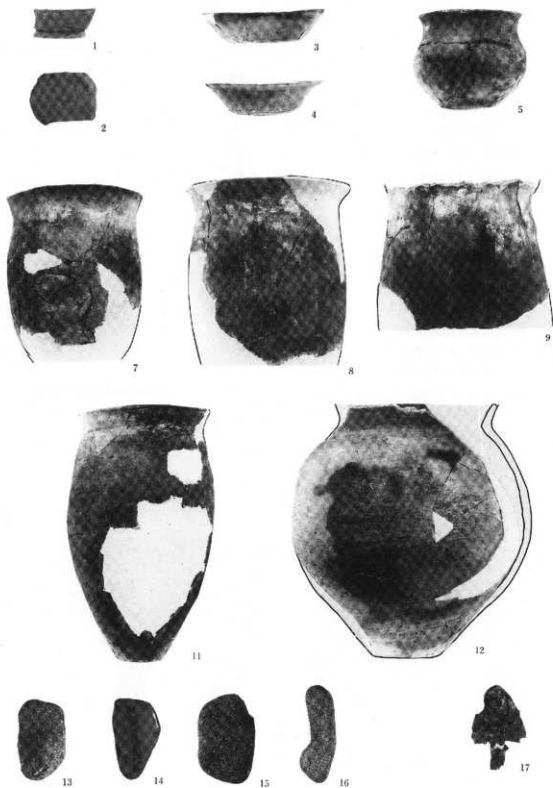


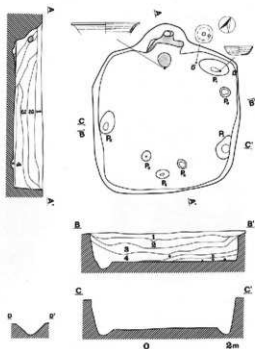
写真57 H12号住居址出土遺物

H13号住居址は、第1区Pお4・5グリッドより検出された。

平面形態は隅丸方形を呈し、南北3.5m、東西3.5m、床面積9.9㎡を測る小形の住居址である。主軸方向はN-23°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は60～73cmと深い。周溝は認められない。

ピットは7個確認されている。東壁に接するP1と西壁に接するP2の2個が対をなす支柱穴と思われるが、P1はやや南側に逸れており、定かではない。P1は58×33cm、深さ18cm、P2は56×35cm、深さ15cmを測る。P3～P5は南壁中央部にあり、P3とP5が並存し、その中央壁側にP4が位置する。出入口部施設に関連するものであろう。P3は25×22cm、深さ6cm、P4は21×32cm、深さ7cm、P5は20×26cm、深さ4cmを測る。P7は北東隅に位置し、37×74cm、深さ27cmの楕円形を呈するもので貯蔵穴と考えられようか。



第58図 H13号住居址実測図 (1:80)

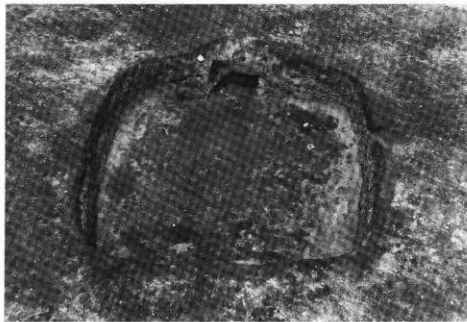


写真58 H13号住居址

住居覆土は、黒褐色土とローム混入土の互層的堆積がみられ、人為的に埋め戻された状態を示していた。以下の6層に分層された。

1層：暗褐色土。2層：パミス・ローム粒子を多量に含む褐色土。3層：黒褐色土。4層：パミス・ローム粒子を多量に含む褐色土。5層：黒褐色土。6層：パミス・ローム粒子を多量に含む灰黄褐色土。

カマド

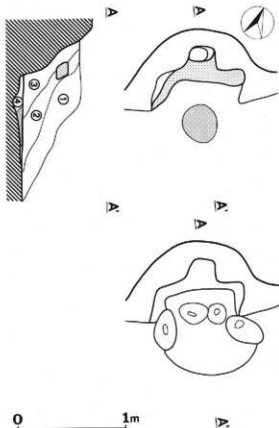
北壁中央部に設置されている。燃焼部は壁外に掘り込まれ、30×80cm程の長方形を呈している。煙道部は燃焼部奥壁中央の柱状の掘り込みと壁外の半円形状の掘り込みからなる。赤褐色粘土を構材とする天井部が奥壁に一部残されていた。火床面には袖部と中央に小ビットが検出された。

カマド覆土は、構材の赤褐色粘土ブロック、ロームブロックを含む灰黄褐色土(①層)、赤褐色粘土ブロックを多量に含む赤褐色土(②層)、灰黄褐色土(③層)、掘り方に貼られた赤褐色粘土混入土(④層)である。

遺物

須恵器環・甕、紡錘車が検出されている。

1は手持ちヘラケズリで底部が調整された須恵器環で、Ⅱ区2層中に廃棄されていたものである。2は底部および外周が回転ヘラケズリで調整された須恵器環で、P7から出土している。以上の須



第59図 H13号住居址カマド実測図(1:30)

恵器環は八世紀第Ⅲ四半期の土器と考えられようか。3は須恵器甕の口縁部破片で、カマド②層から出土したものである。4はP7左脇床面から検出された紡錘車で、中央部の右側にも穿孔が施されているものである。

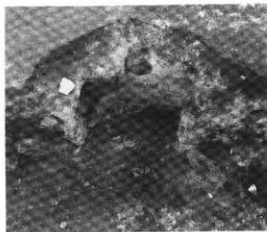
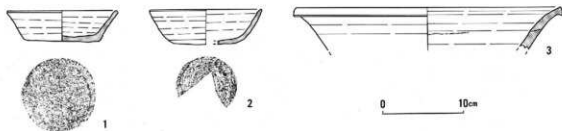


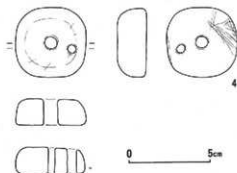
写真59 H13号住居址カマド



第60図 H13号住居址出土土器 (1 : 4)

表21 H13号住居址出土土器観察表

発見番号	種別	器形	法量	残存	成序	製	色調	出土位置	備考
1	酒器	杯	13.6 9.1 3.7	口縁2/5 底部完形	PPH	→底面切り磨し(切り磨し力不明) 外面: 底面手磨ちへラケズリ	内面: 7.5Y6/1 外面: 7.5Y6/1 断面: 10Y6/1	I区2層	
2	酒器	杯	13.8 7.8 4.3	口縁2/4 底部3/5	PPH	→底面切り磨し(切り磨し力不明) 外面: 底面および外周凹陥へラケズリ	内面: 7.5Y6/1 外面: 7.5Y6/1 断面: 7.5Y6/1	P7	火傷あり
3	酒器	甕	33.0 — (5.2)	口縁1/5	PPH		内面: 2.5Y4/1 外面: 10Y4/1 断面: 5Y3/1.2.5Y4/1	ホーフ②層	



第61図 H13号住居址出土土器 (1 : 2)

表22 H13号住居址出土土器観察表

発見番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
4	粘刺車	泥状土	4.3	4.3	1.8	41	I区東面	

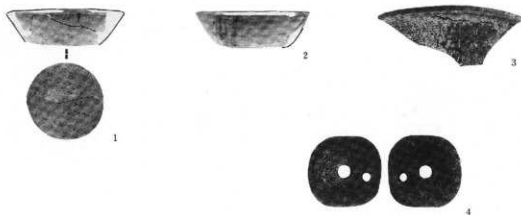


写真60 H13号住居址出土土器

(14) H14号住居址

古墳時代

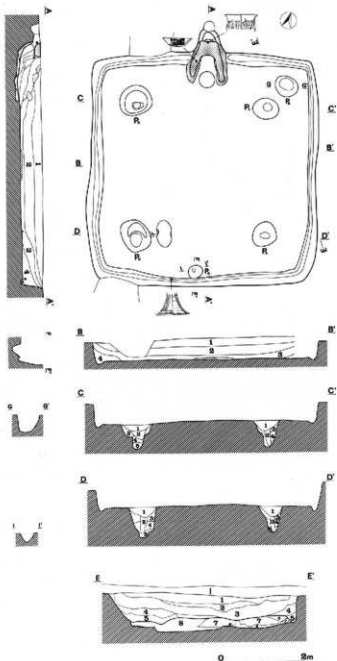
H14号住居址は、第1区Pう1・2グリッドより検出されている。南北壁東側上部が、M5号溝状遺構によって切られている。なお、Eセクション北側は聖原遺跡として調査された部分である。

平面形態は、整った隅丸方形を呈し、南北5.7m、東西5.4m、床面積27.7㎡を測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。

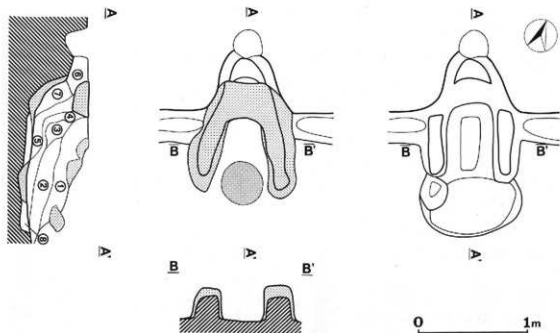
壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は44~48cmである。壁直下に幅8~25cm、深さ2~24cmのU字形を呈する周溝が全周する。

主柱穴は、壁よりに規則的に配置された4個(P1~P4)である。掘り方は2段の掘り込みで、径10cm程の柱痕が確認された。P1は52×62cm、深さ65cm、P2は72×77cm、深さ60cm、P3は79×66cm、深さ73cm、P4は56×57cm、深さ62cmを測る。また、南壁中央に接する位置に、31×36cm、深さ23cmの小ピット(P5)が確認された。さらに、50×57cm、深さ41cmのP6が北東隅で確認されている。

覆土は、パミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土(5層)、黒色土(4層)が壁際を埋め、住居全体はパミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土(1層)・黒褐色土(2層)、にぶい黄褐色土(3層)の堆積である。なお、Eセクションで確認した掘り方部分では、ロームと褐色土の充塞が確認されている(6~8層:7層はロームブロック、6層は褐色土ブロックである)。



第62図 H14号住居址実測図(1:80)



第63図 H14号住居址カマド実測図 (1:30)



写真61 H14号住居址カマド

カマド

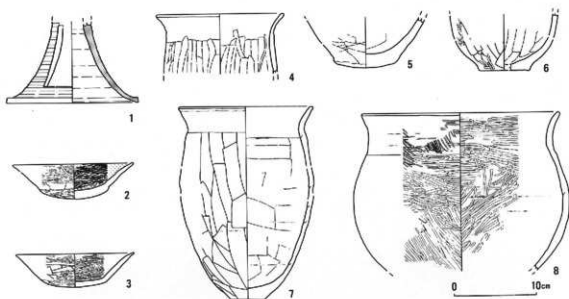
北壁中央部に位置する。煙道部は舟先状の掘り込みからなり、立ち上がり部には灰白色・橙色粘土が貼られている（先端のピットは攪乱）。袖部は地山で芯が葺り出されたものがある。袖部から煙道部にかけて貼られた橙色粘土が残り、一部天井部が確認された。また、左袖部先端には袖石埋め込み用と考えられるピットが確認された。

覆土は、褐色土（⑥層）、黒褐色土（⑦層）が煙道部を埋め、カマド上面には大形の灰白色・橙色粘土ブロックを含む灰褐色土（①層）の堆積、カ

マド内には小形の灰白色ブロックを多量に含む灰黄褐色土（②層）、灰白色ブロック主体の褐色土（③層）、橙色粘土ブロック主体の褐色土（④層）、褐色土（⑤層）の堆積である。また、焚口部の皿状の掘り方、火床部の長方形の掘り方は、ロームブロックを混ぜた暗褐色土（⑧層）で充填されていた。

遺物

検出された主要遺物は、古墳時代後期の土器様相を示す須恵器高坏と土師器坏・土師器長胴壺・土師器球胴甕である。また編物石と考えられる石



第64図 H14号住居址出土土器(1:4)

表23 H14号住居址出土土器観察表

図記番号	器形	口径	底径	高さ	底厚	成形	装	色	出土位置	備考
1	深腹器	高杯	—	—	—	ロコソ	外面: 洗刷を施す→通し窓を穿つ	内面: N6/0 外面: N8/0 断面: N8/0	Ⅱ区4層	
2	土器器	杯	—	—	—	非ロコソ	内面: ヘラミゴキ・黒色粘土 外面: ロコソ→底面ココナダ・底面ヘラタズリ→ヘラミゴキ	外面: 7.5Y R7/4 断面: 7.5Y R3/2	Ⅱ区3層 Ⅱ区2層	
3	土器器	杯	—	—	—	非ロコソ	内面: ロコソココナダ・みこみ粘土→ヘラミゴキ 外面: ロコソココナダ・底面ヘラタズリ→ヘラミゴキ	内面: 8 Y R6/8 外面: 5 Y R6/8	Ⅱ区3層	カマド跡
4	土器器	壺	—	—	—	ロコソ	内面: ロコソココナダ・割部ナダ 外面: ロコソココナダ・割部ナダ	内面: 7.5 Y R6/4 外面: 5 Y R6/4 断面: 5 Y R6/4	Ⅱ区3層	カマド跡
5	土器器	壺	—	—	—	非ロコソ	内面: ヘラコナダ 外面: ナダ	内面: 10 Y R7/4 外面: 7.5 Y R4/1 断面: 10 Y R7/4	Ⅱ区3層 P2	カマド跡
6	土器器	壺	—	—	—	非ロコソ	内面: ナダ 外面: ヘラタズリ後ヘラミゴキ	内面: 10 Y R4/1 外面: 5 Y R6/4 断面: 5 Y R6/4	Ⅱ区3層	
7	土器器	壺	—	—	—	非ロコソ	内面: 割部→底面ヘラコナダ→ロコソココナダ 外面: 割部・底面ヘラタズリ→ロコソココナダ	内面: 5 Y R6/4 外面: 5 Y R6/4 断面: 5 Y R6/4	Ⅱ区3層	カマド跡
8	土器器	壺	—	—	—	非ロコソ	内面: ロコソココナダ→割部ヘラコナダ→ヘラミゴキ 外面: ロコソココナダ→割部ヘラタズリ→ヘラミゴキ	内面: 5 Y R6/8 外面: 5 Y R6/8 断面: 5 Y R7/4	Ⅱ区3層	カマド跡

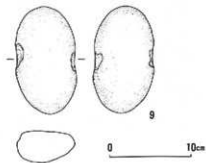


表24 H14号住居址出土土器観察表

図記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
9	磁物石	肉内石 灰山石	14.1	7.5	4.0	480	Ⅱ区3層	可動線に ノッチ状加工

第65図 H14号住居址出土土器(1:4)

器もみられた。

1は、須恵器高坏の脚部破片で、南壁周溝上の4層から出土したものである。

2・3は、体下位に稜を有する土師器杯で、2は内面黒色処理されたものである。2はN区3層とⅢ区2層に破片が分布していたものである。3は、カマド左袖の粘土に張り付いた状態で出土した完形品である。

4～8は、土師器甕で、4はカマド煙道部⑥層から検出された長胴甕、5はカマド②層とP2内から検出された底部破片、6はN区3層に分布していた球胴甕の底部である。7の小形長胴甕と8のヘラミガキされた球胴甕は、それぞれカマド②層に破片が集中していたものである。

9は編物石と考えられ、両側縁にノッチ状の加工が施されている。P3脇床面で出土している。



写真62 H14号住居址

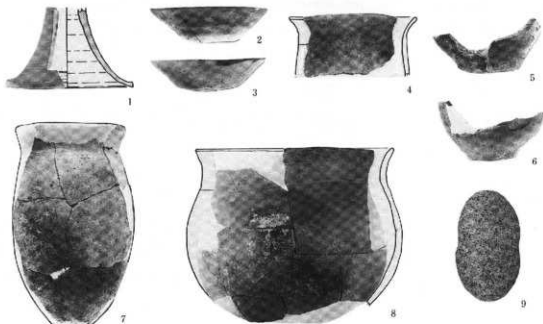


写真63 H14号住居址出土遺物

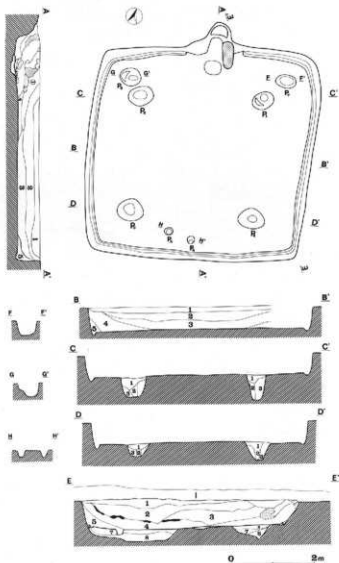
H15号住居址は、第1区Pい2・3グリッドより検出されている。本住居址のEセクション北側箇所は、聖原遺跡として調査された部分である。

南北5.2m、東西5.4mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は24.8㎡である。主軸方向はN-12°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は60~72cmである。壁直下に幅7~16cm、深さ3~14cmのU字形を呈する周溝が全周する。

主柱穴は、径10cm程の柱痕が確認された4個（P1~P4）が壁より定期的に配置されていた。P1は41×54cm、深さ61cm、P2は48×52cm、深さ46cm、P3は53×65cm、深さ29cm、P4は50×66cm、深さ43cmである。南壁中央側では、小ピット2個（P5・P6）の並存が確認された。P5は18×20cm、深さ17cm、P6は20×18cm、深さ18cmである。また、東西隅の対称的な位置に32×49cm、深さ45cmのP7と44×53cm、深さ34cmのP8が存在していた。

覆土は、周溝を黄褐色土（6層）が埋め、パミス・ローム粒子を含む黒褐色土（5層）、にぶい黄褐色土（4層）が壁際を埋める。住居全体は暗褐色土（1層）、パミス・ロームブロックを多量に含む褐色土（2層）、黒褐色土（3層）の堆積である。なお、Eセクションで確認した掘り方部分では、ロームと褐色土の充填によって床面が形成されていた（7・8層、7層はロームブロック）。



第66図 H15号住居址実測図（1：80）

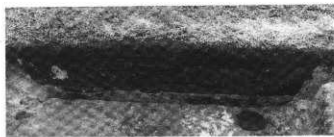
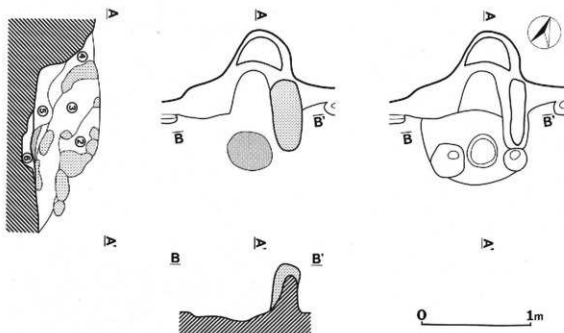


写真64 H15号住居址覆土



写真65 H15号住居址



第67図 H15号住居址カマド実測図(1:30)

カマド

北壁中央に存在する。煙道部は半楕円形状の2段の掘り込みである。地山で造り出し粘土を貼って構築された袖部は、右袖部のみが残存していた。両袖部先端には袖口埋め込み用と考えられる小ピットが確認された。

覆土は、カマド前面に広がる粘土粒子を多量に含む黒褐色土(①層)、崩落した橙色粘土ブロックを含む暗褐色土(②層)と黒褐色土(③層)、煙道部を埋める黄褐色土(④層)、炭化物片・灰を含む黒褐色土(⑤層)である。また、⑥層は火床部の皿状の掘り方を充填した土層で、ローム混入の暗褐色土である。

遺物

検出された主要遺物は、土師器杯・壺、編物石、葎石である。

1は稜を上部に有し、口縁部が短く内湾する土師器杯で、Ⅲ区3層から出土したものである。

2は球胴形を呈すると考えられる土師器壺底部破片で、ヘラミガキが施されている。カマド③層の出土である。

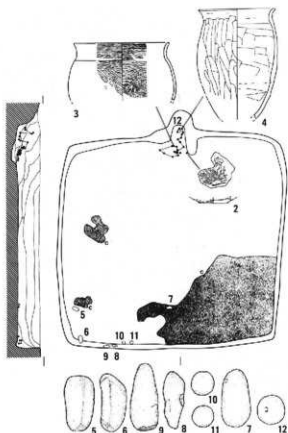
3はヘラミガキされた土師器球胴壺で、カマド③層に破片が集中分布していたものである。

4は土師器長胴壺で、カマド③～⑤層に破片が集中分布していたものである。

5～8は明確な加工・使用痕はみられないが、編物石と考えられようか。9は端部に顕著な葎打痕がみられる葎石である。5・6・8・9は南西隅壁際に集中分布する。また、この分布範囲に円形に整形された軽石2点(10・11)があった。同様なもの(12)はカマド③層でも出土している。

なお、南東隅の5層ないし4層上面にはカヤ状の炭化材が広範囲に分布していた。

本住居址検出の上器は、古墳時代後期の土器様相と考えられる。



第68図 H15号住居址遺物分布図

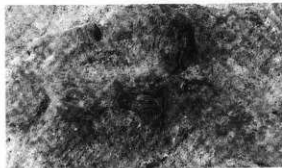
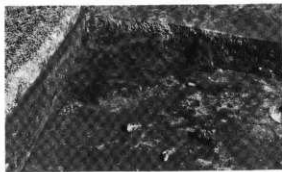
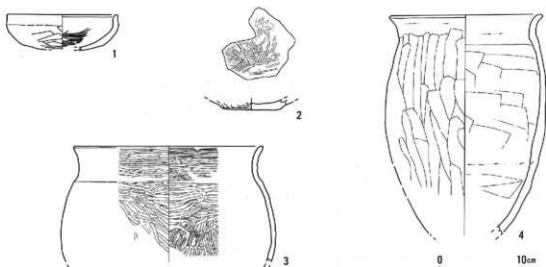


写真66 カヤ状炭化材出土状態



第69図 H15号住居址出土土器 (1:4)

表25 H15号住居址出土土器観察表

図記 番号	瓶 別	器 形	法 量	残 存	成 形	装 飾	色 調	出土位置	備 考
1	土師器	杯	(13.5) — (4.3)	底面1/5	赤ロタコ	内面: 口縁ヨコナデ・ふこみ底ナデ→ヘライガキ 外面: 口縁ヨコナデ→体部へラケズリ	内面: 7.5YR6/3 外面: 7.5YR6/3 断面: 7.5YR6/3	Ⅱ区3層	
2	土師器	甕	(7.2) — (1.3)	底面3/4	赤ロタコ	内面: ナデ→ヘライガキ 外面: へラケズリ→ヘライガキ	内面: 7.5YR6/4 外面: 7.5YR7/4 断面: 7.5YR7/4	カマド③層	
3	土師器	甕	(23.6) — (14.6)	口縁1/3	赤ロタコ	内面: ヘライガキ 外面: ヘライガキ	内面: 5YR6/6 外面: 5YR6/6 断面: 5YR6/6	カマド③層	
4	土師器	甕	18.4 — (26.5)	口縁2/3	赤ロタコ	内面: 口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面: 口縁ヨコナデ・胴部ナデ	内面: 5YR6/3 外面: 5YR6/3 断面: 5YR6/3	カマド ③~⑤層	

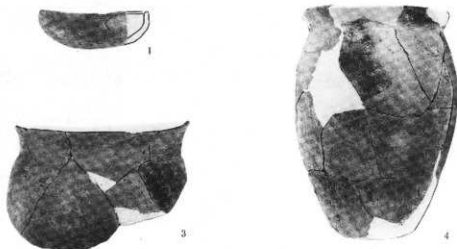
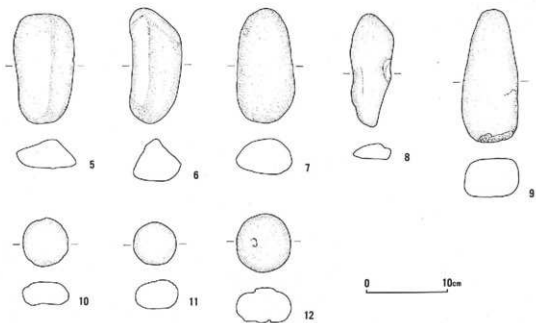


写真67 H15号住居址出土土器



第70图 H15号住居址出土石器(1:4)

表26 H15号住居址出土石器观察表

种别番号	种别	材质	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
5	磨物石	石英 安山岩	13.4	7.5	3.9	480	Ⅱ区北面	
6	磨物石	角閃石 安山岩	14.2	6.4	5.8	500	Ⅱ区北面	
7	磨物石	安山岩	14.1	7.0	5.1	560	Ⅱ区3層	
8	磨物石	輝石 安山岩	13.9	5.3	2.2	220	Ⅱ区5層	
9	磨石	石英 安山岩	16.4	6.9	5.0	840	Ⅱ区5層	淵部に磨打痕
10	不明	磨石	5.9	5.5	2.9	40	Ⅱ区5層	
11	不明	磨石	5.3	5.2	3.5	80	Ⅱ区5層	
12	不明	磨石	7.1	6.7	4.4	190	Ⅱ区5層	

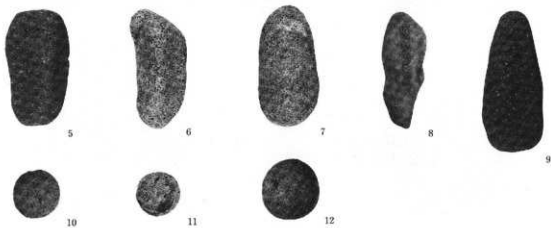


写真68 H15号住居址出土石器

(16) H16号住居址

古墳時代

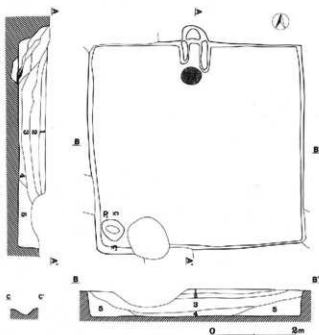
H16号住居址は、第1区Pあ・い7・8グリッドより検出されている。南北壁西側上部および東西壁南側上部は、M3・5号溝状遺構に切られ、南壁西側では、さらに床面まで攪乱坑によって破壊されていた。

平面形態は、南北5.0m、東西5.2mの整った方形を呈し、床面積は23.6㎡を測る。主軸方向はN-5°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は57~64cmである。周溝は存在しない。

ピットは、47×58cm、深さ15cmの浅いP1のみが南西隅で確認された。

覆土は、5層に分層された。5層は、ロームブロックを多量に含む褐色土で壁際の堆積土である。住居全体の堆積は、1層の黒褐色土、2層の暗褐色土、パミス・ローム粒子を多く含む3層の黒褐色土、4層の黒褐色土であった。



第71図 H16号住居址実測図(1:80)

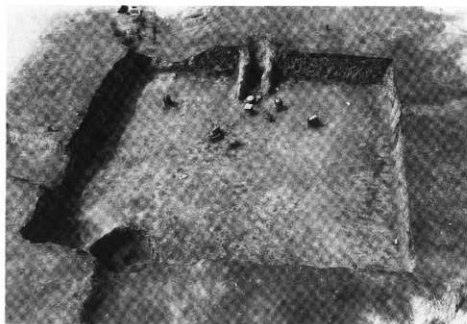


写真69 H16号住居址